

---

# **帝都防空録 月夜の邂逅**

流水郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝都防空禄 月夜の邂逅

### 【Zコード】

N4136F

### 【作者名】

流水郎

### 【あらすじ】

ある想いを胸に秘め、帝都に向かうB-29。それに挑む、夜間戦闘機『月光』。航空機に宿つた“艦魂”2人が、月明かりの下で対峙する……。“艦魂”といっても、最初なので得意分野（？）である航空機の話にしました。なので正確には艦魂とは呼べないですが（汗）



紅く燃える街を見下ろしつつ、巨大な鉄の塊が飛んでいく。

B - 29『スーパー・フォートレス』。

排気タービンエンジン4基を搭載する『超空の要塞』。

その中の1機の機首に、花束を抱えた少女の絵が描かれていた。

「……今日も、よく燃えてやがる」

操縦士が呟いた。

「あの中にいるのは、女子供ばかりなんだろうな」

「ジャック、あまり考へるな」

機長のレイモンド＝ウェイン大尉が呟つ。

半分は、自分に言い聞かせているようだった。

「お前がそんなことを言つていては、マリーに悪いだらう」

ウェイン大尉は、傍らにいる1人の少女に目をやつた。

栗色の髪に金色の瞳、レモン色のワンピースを着ていて、機首に描かれた少女と、どことなく似ている気がする。

しかし手に持っているのは花束ではなく、一振りのサーベルだった。

「いえ、機長……私は別に……」

何處か悲しげな笑みを浮かべ、マリーと呼ばれたその少女は言つた。  
……この可憐な少女が、超空の要塞B - 29そのものであるなどと、

誰が信じるだろ？

「なあ、マリー」

操縦士・ジャック＝クレイズ中尉は話しかける。

「お前、この戦争に正義はあると思つか？」

「……わかりません」

マリーは素っ気なく答えた。

「でも私は、例え自分が正義ではなくても、戦います。それが私の使命だから」

それを聞いて、操縦桿を握るジャックは舌打ちする。  
そして、歯ぎしりしつつ言った。

「可愛い顔しても、所詮は兵器か！」

「止せ、ジャック！」

ウェイン大尉が怒鳴った。

「言つていいことと悪いことの区別くらい、つかないのか！」

「いいんです、機長……ジャックさんを叱らないで……」

マリーが止めに入る。

ジャックはフンと鼻を鳴らすと、再び操縦だけに集中した。

「私は兵器……でも……」

「……この戦いに勝つて……私は自由になります……！」

「私は兵器……マリーは言ひづ。

「……この戦いに勝つて……私は自由になります……！」

……  
……  
……  
……

明朝

日本海軍 厚木飛行場

「昨夜の爆撃は、また凄かつたな

「ああ、大勢死んだやううね」

二人の兵士が、双発戦闘機の前で談話している。

夜間戦闘機『月光』。

元々は陸上攻撃機を護衛する、遠距離戦闘機として作られたが、双発故に運動性が低く、敵戦闘機に対抗するのは不可能と判断され、二式陸上偵察機として活躍することとなつた。

だがより高速の偵察機が求められるようになり、ほとんど存在意義を失つたこの機体は、『斜め銃』が発案されたことにより、対爆撃機用の夜間戦闘機『月光』として生まれ変わることとなつたのだ。

「大本營じゃ、まだ皇軍は快進撃を続けてるつて大嘘を流してやが

る

「ああ。空襲で死んだ連中は、俺等を怨むやつ」

「ふう……消えるは電気、電気は光る、光るは親父のハゲ頭……」

荻堂が意味もなくぼやくと、月光の後部座席から、何かがひょっこりと顔を出した。

端整な顔立ちの少女だ。

武士のような羽織りに袴を履き、腰には日本刀を差している。

それよりも彼女は、月明かりのような不思議な『氣』を放っていた。

「なんだ小夜、まだ起きてたのか」

「うん、なんか眠くなくて」

小夜はてへへ、と笑う。

「夜間戦闘機なんだから、朝はゆっくり寝てろよ」

「でも、他の『月光』は寝ないよ」

「せりや、お前は特別な戦闘機だからな」

「そりゃ、お前は特別な戦闘機だから」

……“艦魂”。

その名の通り、艦船に宿ると言われる魂だ。

それぞれ違いはあるが、多くは美しい女性の姿をしていて、特定の人間にしか見えないといつ。

艦船は、多くの職人の手で造られる物であり、彼らの想いと誇りが、物言わぬ兵器に魂を宿すのだろう。

航空機に宿る“艦魂”は極めて珍しく、この『月光』……小夜には、何か特別な想いが込められているのかも知れない。

操縦士の荻堂上飛曹と、後部座席搭乗員の五十嵐上飛曹は、ラパウルの時代から月光に乗るベテランの搭乗員だ。日本軍は、パイロットに割り当てる機体を特定していない（機種は大抵固定される）。

だがこの2人は例外的に、小夜の宿る機体のみに乗っている。理由は、この機体は荻堂と五十嵐以外の者では、「何故か」まともに操縦できないのである。

……無論、小夜との相性の問題だらう。

「ねえねえ、他の操縦士たちが話してゐるのを聞いたんだけど、絶対に墜ちないB-29がいるんだって？」

小夜が後部座席から降りた。

飛び降りる、というよりも、舞い降りると書ひべき、優雅な動作だった。

「ああ、そのB公を狙つた戦闘機は、近づくとすらできず墜とされるって、噂になつてゐる」

「機首に、花束抱えた女の絵が描いてある機つぢゅう話や。他のB公と何か違つんかね？」

「どうもおかしいんだよな。熟練の搭乗員が、プロペラの後流に飛ばされたりとかさ……」

すると小夜は少し考えた後、いつ呟つた。

「今度、そのB - 29を探してみたいの」

「えつ ？」

「そのB - 29を墜とせば、みんな少しばか安心して戦えると思つる。  
だから……」

「ふうむ……」

荻堂は腕を組んだ。

「どうするんや、荻堂 ？」

と、五十嵐。

「……いいんじやないか、俺等の手で墜としちゃいい。いつひいて  
小夜がついてるんだからな」

「ほな、決まりやね。頼んで、小夜」

「うん ！ 任せて ！」

……日本軍に未来は無い。

荻堂も五十嵐も、わかっていた。

アメリカの工業力は圧倒的だ。

B - 29のような巨人機を量産し、惜しげもなく投入していくのだ。

日本軍は迎撃戦闘機として、異形のエンテ型戦闘機『震電』、ロケ

ット戦闘機『秋水』などを開発しているが、実用化には程遠い。

しかし、何もできないからと黙つて、何もしない訳にはいかない。

日本人の意地、そして戦闘機乗りの意地だ。

彼らの愛機に宿る少女……小夜も、命の限り彼らを支えると、誓つていた。

……そして、3日後の夜。

B-29の編隊が、帝都に向かつ。

その中に、『マリー』号の姿もあつた。

「……そろそろ、ジャップの戦闘機が来るころだ」

ウェイン大尉が言つた。

傍らに、マリーの姿がある。

「用心しろ、連中は死を恐れていない」

「チツ……そりや國を守るために、必死でしうからなア」

ジャックが忌々しげに言つ。

副操縦士はジャックの口調に恐怖を覚えたのか、そっぽを向いて無視を決め込んでいる。

「……ジャックさん」

マリーが口を開いた。

「……何だ？」

「貴方は、何がそんなに……不満なのですか？」

その言葉が、ジャックに火を着けた。

「何が不満かって！？ わからぬえなら教えてやるよ、ポンコツ爆撃機！」

「おい、ジャック！」

ウェイン大尉がたしなめるが、ジャックは無視して続ける。

「小さいころな、どうしようもないクソガキの俺は、周りの不良と一緒にになって下町を暴れ回った。イエス様に唾吐きかけた分だけ偉くなれるって、本機で信じていたんだよ！」

「……」

「そしてある日、とうとう人を殺しかけた。母ちゃんは俺の頬を打つて、命は尊いものだと教えてくれた。そこで俺はようやく気づいたんだよ、自分がどれだけちっぽけで、どれだけ弱いかってことを！」

「ち、中尉、お願ひですから落ち着いて操縦を……」

航法担当が、ジャックの剣幕に怯えながら言つ。

「本当に強くなりてえと思って、俺は軍に入った！ 命がけで戦

う空の戦士に憧れて、必死で飛行機の操縦を学んだ！だが今やつていることは何だ！？俺は母ちゃんが尊いものだと言つた命を、何百も奪つている！無抵抗の女子供の命を！そして勲章までもらつて英雄扱いだぜ！？ふざけた話だよ、街中で1人殺せば犯罪者になるつてのに！」

そこまで言つて、ジャックは黙つた。  
肩で荒く息をする。

「……ジャックさん、私は……！」

マリーが口を開く。

だがその時、乗組員の1人が叫んだ。

「来ました！下方にジャップの戦闘機！」

「機種は！？」

「アーヴィング月光！」

夜空の中、1機の双発戦闘機が近づいてくる。  
B-29の下部に潜り込む気だ。

「撃て！撃ち墜とせ！ジャック、加速だ！」

「了解、つと！」

その時、マリーの表情が変わった。

側面の窓から、接近してくる月光を見る。

「どうした、マリー？」

「……あの戦闘機……」

マリーの体が、小刻みに震え始めた。

「私と同じ……『兵器の精霊』がいる……！」  
スピリット・オブ・アームズ

「なんだって！？」

「マリーの他に、飛行機に宿っている奴がいたのか！？」

機内がざわつく。

マリーは数秒間、何かを考えていたが、意を決したかのようにツイイン大尉に言った。

「……機長、お願いです！あの戦闘機と、話をさせてください！」

「なんだと！？」

「相手も同じ“兵器の精霊”なら、私が説得すれば……引き下がつてくれるかもしれません！」

そんなことは有り得ないと、マリーは分かっていた。  
だが生まれて初めて、自分と同じ存在に出会ったのだ。  
会つて話がしたかったのである。

「……いいだらう、行つてきなさい。その間は、一切攻撃をしない」

ウェイン大尉は優しく言った。

「ありがとうございます！」

お礼を言つた後、マリーはジャックの方を向いた。

「ジャックさん……私も、貴方と同じ考えです」

マリーは機の壁をすり抜けて、外へ出る。

窓から、彼女が主翼の上に立っているのが見えた。その後口を開いたのは、ジャックだった。

「機長、真に勝手ながら、スピードを少し落とさせていただきます」

「何？ どういうことだ？」

ウェイン大尉が訝しげに問う。

「……その方が、話しやすいでしょう」

「…………そうだな」

ウェイン大尉は微かに笑った。

荻堂は月光の操縦桿を握り、夜空を駆けていた。  
五十嵐が後部座席で、周囲を見回す。

「いたで荻はん！ 一時方向に敵編隊！」

「よし、旋回する！ 小夜、行くぞ！」

『うん！』

この時期、大部分の月光には機上レーダーも搭載されていた。しかしあまりにも性能が悪いのと、レーダーの取り扱いに詳しい整備員がないため、五十嵐が取り外してしまったのである。だが彼らには、レーダーなど不要だ。

機体と同化している小夜が、荻堂と五十嵐を導くのである。

『いた、左20度方向に例のB-29！ 女の子の絵が描いてある奴！』

「あそこか！ いつも通り下部に潜り込んで、斜め銃を喰らわせるぞ！」

月光の『斜め銃』は、その名の通り20mm機銃を30度前後の仰角で装備したものだ。

発案者は現在の厚木の第二〇一航空隊司令官、小園安名大佐だ。

「敵さんも撃つてきたで！」

「ああ！ 20mm弾が確実に命中する距離まで、接近する！」

荻堂の見事な操縦により、B-29からの射撃はなかなか命中しない。

その時、突如小夜が叫んだ。

『あのB - 29、“艦魂”がいる！』

「何！？」

『気配を感じるの！私と同じ、“艦魂”的氣配がするの！』

それを聞いて、荻堂は合点がいった。

“艦魂”が宿つているのなら、「墜ちない」という噂も頷ける。自分たちも小夜のおかげで、何度も危ない橋を渡つて来れたのだ。

「アメリカさんの“艦魂”も……やっぱり女なんやろか？」

「……そりゃないか？機首に女の絵を描くぐらいだから……」

荻堂は躊躇した。

アメリカ軍の“艦魂”も、国のために、仲間のために戦う健気な少女なのだろう。

自分はそれを撃てるのか……？

「！荻はん、あれ！」

五十嵐が叫んだ。

見ると、B - 29の主翼の上に、一人の少女が立つているのが見えた。

闇の中だというのに、何故か顔がはっきりと見える。

「“艦魂”……！」

いつの間にか、B - 29からの防御射撃が止んでいた。

速度も、少し落ちている。

『荻堂さん、五十嵐さん！あの“艦魂”、私を呼んでる！会って話をしたいって！』

「小夜……」

『お願い、行かせて！』

戸惑つ荻堂に、後部座席の五十嵐はさつと聞いた。

「荻はん……わてらの姫様を、信じましょ」

「…………やうだな。行つてこい、小夜！」

『うん！ ありがと！』

月光の機体から、小夜の姿がすーっと浮かび上がった。そして、B-29の主翼に立つ、マリーの元へと飛んだ。

：

闇夜の中、2人の少女が向かい合つ。

1人は日本を焼き払うために生まれ、もう1人はそれを阻止するためには生まれた。

しかし2人は、互いに敵味方を超えた、何か強い親近感を持つていた。

「……はじめまして」

先に口を開いたのは、マリーの方だった。

「アメリカ空軍戦略爆撃機B - 29……マリーと呼ばっています」

「……私は小夜。日本海軍夜間戦闘機『月光』の“艦魂”……」

彼女らの会話は人間の言葉ではなく、所謂テレパシーのようなもので行われている。

それ故、言葉の壁は無い。

「初めてです。私以外で、航空機に宿るスピリットに出会ったのは

「私も。でも、嬉しくない。とても悲しい」

「そうですね……私は星条旗、貴女は旭日旗の下にいるのですから

マリーが哀しげな笑みを浮かべる。

「サヨさん、貴女には……欲しいものがありますか？」

「欲しい……もの？」

それは小夜にとつて、考えたことすら無い言葉だった。  
空を飛び、戦い、搭乗員を守ることだけを考えてきたのだ。

「私は、自由が欲しい」

「自由……？」

「私の機体を作った人が、言つたのです」

マリーは握っていたサーベルを、鞘から引き抜く。  
白刃が、月明かりを反射して煌めいた。

「自分は真珠湾で、兄を殺された。だから必ず、日本を灰にしてくれと。そして戦いに勝てば、私は自由になれる」と……

サーベルの鞘を空中に放り捨てる。それは如何なる物質でできていたのか、塵となつて闇に消えた。  
サーベルを小夜に向けて構え、対峙する。

「……もうすぐ、爆撃のコースに入ります。退かないと言つながら、それまでに貴女を墜とさなくてはならない」

「……」

「無駄だとは思つけど、言ひます。退いてください」

小夜はその言葉に、行動で応えた。

腰の日本刀に手を添え、抜刀の構えを取る。

「……わかりました」

マリーは少しの間目を閉ざすと、夜空に跳躍……否、飛翔した。小夜目がけて、袈裟懸けにサーベルを振り下ろす。

「たあつ ！」

小夜は抜き付けの一刃で、マリーの斬撃を受け流し、返す太刀でマリーの首筋を狙う。

抜刀術（居合い）は技を出した後の隙が大きい、などとよく言われるが、それは誤りだ。

実際には敵を倒すまで、一瞬たりとも動きを止めないことが多いのである。

マリーが身を反らせて刃をかわすと、刺突を繰り出す。

小夜はそれを紙一重で避け、体を回転させマリーの横に回り込んだ。そして2人の刃が正面からぶつかり、鍔迫り合いが始まる。

一方、B-29は速度を上げ、月光本体への防御射撃も再開していった。荻堂も下腹に潜り込み、更に接近を続けていた。

「ちひ、アメ公は贅沢に弾ばら撒くよな ！」

「ホンマやね ！」

死の恐怖が、襲ってくる。

戦闘機乗りの背には、常に死神が張り付いているのだ。

それでも荻堂は、接近を止めない。

「俺たちの誇り、俺たちの意地……見せてやうあ……」

…B-29内部では、機関銃手が必死に迎撃していた。ジャックが機を加速させ、月光を振り切ろうとする。

「奴らの狙いは、爆弾倉内の燃料タンクだ！ ジャック、もつと加速しろ！」

「やつてます！ しかし後1分足らずで、爆撃コースに入っちゃいますぜ！」

「くそ、早く墜とせ！ 爆弾倉を開けられないぞ！」

その時ジャックは、空中で日本軍の“兵器の精靈”と戦う、マリーの姿を見た。

そして機関銃手に言ひ。

「軍曹、<sup>アーヴィング</sup>月光じゃなくて、相手のスピリットを狙えないかマリーに機銃の前まで誘導させる……！」

「スピリットに機銃つて効くんですか！？」

「撃つてみなきゃ分からぬだろ！」

だが、ウェイン大尉が言った。

「駄目だ！ 彼女たちの戦いに、水を差してはならない」

「けど機長！」

「ジャック、お前だつて知つていたはずだ。マリーがどんな思いで飛んでいたかを」

その言葉を聞き、ジャックは何も言えなくなつた。

「……クソツ」

小夜とマリーの戦いは、熾烈を極めていた。

剣はいくらか刃こぼれし、小夜の右頬、マリーの左肩にも、微かに血が滲んでいる。

それでも2人は夜空を舞い、刃を交える。

「はあつ！」

「せいつ！」

マリーの一撃を、小夜が刀の峰で受け止める。

小夜は後方に飛び退きつつ納刀し、再び抜刀の体勢を取る。

風防が音を立て割れる。  
が、しかし。  
B - 29の機銃が、月光に命中した。

「！」

小夜がそれに気を取られた瞬間、マリーは体ごと小夜にぶつかつた。

そしてそのまま、B-29の胴体に小夜を押しつける。

「終わりです……私は、自由になるッ！　！」

小夜の胸田がけて、マリーが刺突を繰り出した。

キィイン……

刹那、澄んだ音がした。

折れた刀身が回転しながら、光輪のように宙を舞う。

「…………！」

マリーは信じられないといった面持ちで、刀身の中程から真っ二つに折られたサーベルを見た。

目の前には、ひびの入った日本刀を握る、小夜の姿があつた。

「自由……素晴らしいことだと思つよ。軍とか国とかに縛られないで、自由に空を飛べたら、どんなにいいだろ？……でも私は…………！」

小夜は刀を両手で持ち、正眼の構を取る。

「…………私に乗る人たちや…………地上にいる人たちのために…………負けるわけにはいかないの…………！」

…………神速、という言葉が似合つであろう。

小夜の刀はマリーの右肩から左脇までを、袈裟に切り裂いた。

真っ赤な鮮血が噴き出す。

マリーは子供のよつな、きょとんとした表情で、小夜の顔を見つめていた。

それとほほ同時に、爆発音がした。

荻堂が爆弾倉に接近し、斜め銃を一気に撃ち込んだのである。マリーの本体であるB-29は機体中程から炎上し、小夜の本体である月光はその脇をすり抜けていった。

「……ごめん。本当に……」

「……いいんです、サミさん」

マリーは言った。

彼女の輪郭線が、次第にぼやけ始める。

「今まで罪無き人を、一方的に殺すだけだった私と……貴女は一対一で戦つてくれました。だから本当に……ありがとうございます！」

「……ありがとうございます……おかしいよ、そんなの……私が……！」

涙を流す小夜に、マリーは首を横に振った。

「……まあ、貴女の操縦士達が心配しています。もう別れましょう。いつこいつとき、日本では何と言つのですか？」

「……さよなら二角、また来て四角」

荻堂が暇なときに口ずさむ遊び歌の、出だしの部分だつた。

マリーはそれを聞いて一ノリと笑うと、墜ちていく自分の本体へと

戻つていつた。

……小夜は涙を無理矢理せき止め、荻堂、五十嵐の元へ向かつた。

……B - 29の機内。

ジャックはまだ、操縦桿を握つていた。

「…………わかつていたわ。街を焼き払う度に、お前が誰よりも悲しんでいたつてな」

ジャックは自嘲的な笑みを浮かべる。

「結局俺は、クソガキ止まりだつたわけだ」

「ジャックさん……」

彼の傍らで、マリーが口を開いた。

「脱出してくください、まだ間に合います」

「俺は星条旗の下で人を殺した。星の印のついた飛行機に乗つて死ぬのが、筋つてもんだ」

ジャックはきつぱりと言つ。

「…………すまねえ、お前を自由こなしてやれなかつた」

「いいえ……」

マリーは首を横に振つた。

「私は幸せでしたよ。……機長、それに他のみんなも、私を仲間と呼んでくれました。それに、口は悪いけど、とても優しい人に操縦してもらいましたから……」

「...」

ジャックは笑って、空を見上げた。

俺も……自由になれたのかな。どうか行きたい気分だ」

「……どこへ行きましょうか？」

.....

荻堂と五十嵐、そして小夜の見ている田の前で、墜ちていくB-2

9が突然急上昇し始めた。

夜空に散華した。

二

荻堂たちは口をきけず、小夜も口をきかず、しばらく無言で飛んで

いた。

厚木の飛行場に近づいてきたとき、

「なあ」

「あの」

『ねえ』

三人が同時に、何かを言いかけた。

「あー、……小夜、先に言え」

『荻堂さんが先でいいよ』

「じゃあ、間をとつて五十嵐、言え」

「えーとな、奴ら……」

五十嵐は、マリーと呼ばれたB-29が、散つていった方角を見た。

「……月に、行こうとしたんやないか　？」

「……俺もそう思った」

『……うん、そうだね。ねえ、2人は……』

小夜は少し躊躇いながらも、言つ。

『平和な時代って、来ると思つ？　アメリカとも仲良くなれるような時代が、来ると思つ？』

「……どうなんやうね、荻堂？」「

「……俺は、来ると信じたいね」

荻堂はそう答えた。

「兵器として生まれた小夜でさえ、平和を願っているんだ。人間が信じなくて、どうするんだよ」

「……そやね、信じましょ」

五十嵐も、子供のような笑みを浮かべて言つた。

『……ありがとう』

小夜はポツリと言つた。

「……さよなら三角、また来て四角……」

「四角は豆腐、豆腐は白い」

荻堂が歌い出し、五十嵐が続ける。

『白いはウサギ、ウサギは跳ねる』

「跳ねるはカエル、カエルは青い」

「青いは柳、柳は揺れる……」

尊ばれるべきはずの、命……

それが傳く散りゆく、戦場……

戦乙女たちは、その悲しき場所で何を思つのか……

彼女たちの物語は、終わらな……

お読みいただき、ありがとうございました。

艦魂物を書きたくて、まずは航空機でやつてみました。

艦船に宿る魂でなく、「航空機に宿った艦魂っぽいもの」とこつこ

となので、正確には「艦魂」とは違いますね（滝汗）

次回は伊四〇〇潜水艦を書いてみるつもりです。

極上艦魂会の先輩方には及びませんが、頑張ります。

普通の戦闘機短編も書いていきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4136f/>

帝都防空禄 月夜の邂逅

2010年10月8日22時29分発行